

フランスへの憧れ—生活・芸術・思想の日仏比較— —総括—

田中 琢三*

本シンポジウムが開催された2013年7月6日・7日の2日間は、両日とも最高気温が35度を超える猛暑であったにもかかわらず、学内外から延べ150名以上の参加があり、盛況のうちにシンポジウムを終えることができた。以下では、今回のシンポジウムのなかで、日本におけるフランス文化受容のどのような側面が問題とされ、討議されたのかを具体的に報告した上で、全体を総括したい。

<セッション I>

1日目のセッション I は、フランスの生活文化が近現代の日本に与えた影響を検討した。まず最初に、作家の宇田川悟氏の講演「フランス料理の日仏交流150年」が行われた。宇田川氏は冒頭で2007年に刊行された『ミシュランガイド東京』を取り上げ、グローバル化する世界におけるフランス料理の現状を分析した。そして、フランス料理の導入に重要な役割を果たした築地精養軒などのレストランや、秋山徳蔵らの料理人に言及しながら、開国から今日に至るまで150年間の日本におけるフランス料理の展開を時代順に紹介した。さらに宇田川氏は、1970年代に一世を風靡した「ヌーヴェル・キュイジーヌ」の終焉後、現在は寿司や懐石などの和食がフランス人の注目を集めていることを強調して講演を終えた。フランス料理に精通した宇田川氏だからこそ語ることができる興味深いエピソードが随所に散りばめられた密度の濃い講演であった。

続いて4本の研究発表が行われた。西岡亜紀氏の発表「宣教師が運んだフランス—長崎・築地・

横浜の近代—」は、19世紀後半にフランスから来日した宣教師たちに注目し、彼らが日本の近代化の過程においてどのような役割を果たしたのかを論じた。私の発表「中原淳一と1950年代初頭のパリ」は、1951年に渡仏したイラストレーターの中原淳一が、パリで何を感じたのか、そして自らの雑誌を通じて日本の読者にパリをどのように紹介したのかを検討した。安城寿子氏の発表「クリスチャン・ディオール受容小史—ある抵抗にいたるまで—」は、1950年代のパリ・モードの影響、特にクリスチャン・ディオールの受容とそれに対する日本の服飾界の反応あるいは葛藤を分析した。北村卓氏の発表「宝塚歌劇におけるフランスのイメージ『ベルサイユのばら』の成立をめぐる—」は、宝塚歌劇を日本の社会的・文化的文脈で捉えながら『ベルサイユのばら』を中心に宝塚のフランス・イメージがどのように創出され変容してきたのかを報告した。その後、本間邦雄氏の司会で、4人の発表者によるパネルディスカッションが行われ、各発表者が会場から事前に集めた質問に答えるという形式で活発な議論が展開された。

<セッション II>

2日目のセッション II では、我が国におけるフランスの芸術・思想の受容を考察した。午前の部では、静岡県立美術館館長で日仏比較文学研究の第一人者である芳賀徹氏の特別講演「ポール・クローデルと大正日本—詩人として、大使として—」が行われた。芳賀氏は、駐日フランス大使として

* お茶の水女子大学

1920年代の日本に約5年間滞在した詩人・劇作家のポール・クローデルに焦点をあて、クローデルが外交官として日仏文化交流に大きな貢献をしたうえで、彼の詩集『百扇帖』に収められた作品を紹介しながら、このフランスの文人が到達した日本文化への理解の深さを浮き彫りにした。芳賀氏の日仏両国の文学に関する該博な知識に裏打ちされたこの講演は、その明快な語り口とスケールの大きさによって聴衆に深い感銘を与えた。

午後の部では、まず詩人の野村喜和夫氏が「日本現代詩とポストモダンの思想」と題された講演を行った。野村氏は1970年代から80年代にかけて自身が発表した詩集を取り上げながら、それらの作品がデリダやドゥルーズといったフランスのポストモダンの思想家から受けた影響について分析した。講演の後半では、前衛的な音楽とともに自作の詩を読み上げる印象的な朗読パフォーマンスが披露された。

続いて3本の研究発表が行われた。1本目はローラン・テシュネ氏の「アンサンブル室町：21世紀の新しい教育」と題された発表である。大学でソルフェージュを教えるテシュネ氏は、伝統的な和楽器と西洋のバロック楽器を融合させた音楽プロジェクト「アンサンブル室町」を主宰している。この発表では、実際の公演映像を交えながら「アンサンブル室町」の基本的な理念と活動が紹介された。有田英也氏の発表「加藤周一の〈雑種文化論〉」は、1950年代前半にパリに留学した評論家の加藤周一が帰国後に発表したいわゆる「雑種文化論」に焦点を当て、留学の成果ともいえるこの日本文化論の眼目とは何か、特に加藤が示した大衆への「希望」とは何かを論じた。アレクサンドル・マンジャン氏の発表「フランス語圏の生存主義者たちと宮本常一：比較研究」は、日本では全く認知されていない「生存主義」(survivalisme)という社会運動を取り上げた。マンジャン氏はアメリカで生まれた「生存主義」のフランス語圏における展開を紹介しながら、「生存主義」の実践

者たちと民俗学者の宮本常一を比較し、両者の類似点と相違点を明らかにした。2日目の最後には岩切正一郎氏の司会で、野村氏、テシュネ氏、有田氏、マンジャン氏によるパネルディスカッションが行われ、日仏文化交流における「身体」というテーマを中心に、会場との質疑応答を交えて活発な議論が交わされた。

本シンポジウムの主眼は、近現代日本におけるフランスの文化的影響の射程とその多様性を明らかにすることであった。そして、その目的は、『ベルサイユのばら』から現代思想に至るまで、多彩な分野の専門家による講演、研究発表、パネルディスカッションを通して、十分に達成されたように思われる。同時に、日本人のフランスに対するイメージ、つまり「フランスへの憧れ」、あるいは逆に、フランス人の「日本への憧れ」がどのように形成されてきたのかという問題を、日本側からの視点だけではなく、テシュネ氏やマンジャン氏の視点、つまりフランス側からの視点によっても検討できたことが大きな収穫であった。

また、今回の講演者や発表者は、大学院生、若手研究者、大学教員、名誉教授、作家、詩人といった、それぞれが世代も専門も経歴も異なる方々であり、この意味で、本シンポジウムは、学術的な交流だけではなく、アカデミズムの枠を超えた広い意味での文化的交流の機会になったということも指摘しておきたい。そして、このシンポジウムの成果を踏まえながら、従来の枠組みにとられない超領域的な日仏比較文化の研究をさらに進めていくことが今後の課題となるであろう。

以上のように、このシンポジウムの2日間は非常に実り多い時間となったといえるが、それは何よりも、暑い中会場に足を運んで下さった参加者の皆様、そして準備や運営にご協力いただいた皆様のご尽力の賜物である。この場を借りて全ての関係者の皆様に心から感謝の気持ちを申し上げます。